ライナー・ホーネック物語 青年期〜 Ⅱ

運命の師との出会い

取材・文　岡本和子

2017年4月、紀尾井ホール室内管弦楽団首席指揮者に就任したライナー・ホーネック。インタビューや密着取材を通してその人となりに迫ります。

音楽愛好家の父の一存でフォアアールベルク州から首都ウィーンに移住したホーネック家の9人の子供たちは、貧しいながらも元気に育っていく。全員が楽器を習っていたが、兄、マンフレートの後を追うようにヴァイオリンを始めたライナー少年は人一倍練習熱心で、一日中部屋にこもって楽器を弾いているような子だった。

「マンフレートは全寮制のツヴェッテル少年合唱団※に入団して楽器から離れた時期があって、私はいつの間にか彼よりも上手になっていました。兄を追い抜いて得意になった私は、ますますヴァイオリンにのめりこんでいきました」

「最初の先生は技術的な指導者としては悪くなかったのですが、ちょっと神経質な人で、あまり好きになれませんでした。次に師事したのがエディット・ベルチンガーというウィーン国立音楽大学の教授です。カール・フレッシュの弟子で、大切な基礎を徹底的に仕込まれました」

1

音楽ギムナジウム（中等教育校）に通い始めたライナーは、ユース・オーケストラでも活躍するようになり、そこで運命の師シュタールと出会う。

ウィーンで3人目の師となったアルフレート・シュタールといえば、ウィーン・フィル・コンサートマスター、ワルター・ヴェラー率いる弦楽四重奏団の第2ヴァイオリンとして活躍したことでも有名で、兄ヨーゼフ（ヴィオラ）、弟ルネ（ヴァイオリン）も同団に入団している。

「演奏家としても、指導者としても非常に優れていました。自分に欠けている部分を次々と引き出してくれる先生でした」

ホーネック少年のヴァイオリン熱は高まる一方で、音楽に専念するために9歳でギムナジウムを中退。ベルチンガー教授が教えるウィーン国立音大の予備科に進学した。シュタールが音楽大学で教えていなかったため、やむを得ず選択した進学の道だったため結局こちらも中退。単発的に個人レッスンを受けていたシュタールだけに師事するようになる。

「『人は誰でも何か伝えたいことを心に秘めている』というのが先生の口癖で、その『何か』を『他者に伝える』ために不可欠な『表現力』を鍛えてくれました。先生は私の音に膨らみをもたせ、表現要素を『大きく』してくれました。意識的に自分の音が『外へ』向かうように弾くことを心がけるようになりました」

「いつも暗い顔で先生のレッスンを受けに行くのですが、終わる頃には笑顔に変わっていました。先生は常に前向きな言葉をかけてくれて、マイナス思考をプラスに変える重要性を教えてくれました。私はマイナス思考に陥りやすいので、今でも『プラス思考、プラス思考』と常に自分に言い聞かせるようにしています」

数多くの後進を育てた名教師シュタールは2000年、61歳で亡くなった。

※ツヴェッテル少年合唱団は、ウィーン北西部に12世紀から存在するカトリック・シトー派の修道院に付属する聖歌隊で、当時少年たちは全員、修道院で寄宿生活を送っていた。自宅に礼拝堂を造ってしまうほど敬虔なカトリック信者として知られるマンフレートだが、多感な子供時代のこうした経験と無関係ではないだろう。

2

3

1 寝ても覚めても練習!
2 師シュタール（中央）を囲むウィーン・フィルの団員たち（ホーネックは右から4番目）
3 ヴェラー四重奏団時代のシュタール（左から2番目）

紀尾井ホール室内管弦楽団
Kioi Hall Chamber Orchestra Tokyo
新日鉄住金文化財団

ウィーンの薫りをまとったモーツァルトの響き。福士マリ子がソリストとして登場。

第108回定期演奏会
〈ホーネックのモーツァルト選集Ⅰ〉
9/22(金)・9/23(土・祝)
19:00　14:00

指揮・ヴァイオリン：ライナー・ホーネック　ファゴット：福士マリ子

モーツァルト：ファゴット協奏曲 変ロ長調 KV191
交響曲 第38番 ニ長調 KV504「プラハ」
ディヴェルティメント 第10番 ヘ長調 KV247「第1ロドロン・ナハトムジーク」